
ウルマを追う娘

うまほね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルマを追う娘

【Nコード】

N8511T

【作者名】

うまほね

【あらすじ】

大陸ティアニーロードには遙か昔から、黒きライオン獅子王ウルマの伝説が語り継がれてきた。貧しい村に住むリズは、人間の男よりも獣に魅力を感じてしまう少し変わった少女。ウルマに想いを馳せ、飢えに苦しむ生活を送る彼女のもとにある日一匹の猫が訪れたことから世界は一変する。近づいてはいけないと言われている森で出会ったおかしいとこだらけな青年と猫により、リズは様々な怪奇現象に巻き込まれてしまう。コメディとシリアスが混じりあった、中世ヨーロッパ風ファンタジーです。西洋のモンスターが沢山出て

くる予定……です。

ブローグ

“ねえちゃん、まーたその本見てるの？そんなだから恋人もできないんだよ”

“うるさいなー。いいじゃない、見るくらい。私の息抜きだもん。いい？もしかしたら将来アンタの義兄さんになるかもしれないんだからね？”

“やだよー！ねえちゃんが言うつとシャレになんないじゃん！”

弟が私によこす眼差しが明らかにヘンテコなものを見やるソレだとしても、気にはしない。もう慣れっこだ。

だから負けじと言い返してやる。弟の小生意気な口を封じるために、眺めていた本のページをヤツに突きつけて。

本来ならば、私が口にしたセリフは冗談だと笑い飛ばす類であるはずなのに、弟の顔面には笑みなど皆無。それどころか引いていた。

どうやらヤツは私が本気だと感じてるらしい。

気を取り直し、私は手元の本に視線を落とす。『ある動物』が描かれた本に。

そしてまた、別の日。

“ねえリズ聞いてくれる！？この前見かけた行商人がカッコよくてさあ……って、聞いてんの？”

“え？ああ、立派な毛皮持ってたよね。まあ私が追い求めてる『彼の毛皮には到底かなわないけどね』”

“いや何言ってるんのあんだ。誰が毛皮のランクの話してるの。そこまで毛皮に対してアツくなれんわ。っていうかなんかムカつくから、得意げに『ふふん』って笑うのやめてくれる！？ほんとにリズってばいっつもそう。もう十八だつてのにこれっぽっちも男に興味ないんだから。あんたが追ってるのはいつだって”

村で数少ない友達の一人であるマリーが少し怒り調子で頬を膨らませる姿も、何度もこの目にしてきた。

“ライオンなんだから”

そう。そうだ。

一度たりとも人間の男に、この胸を高鳴らせたことなんか無い。

普通の女の子が抱くであろうドキドキを、私は人間の男に求める

ことはできなかった。

もしあるとするならば、それは……男ではなく、オス。

私の心をつらえて離さない、唯一の存在。

ライオンだった。

どうしようもなく惹かれている。あの日からずっと。

そして

私は信じてる。

『ウルマ』の伝説を。

馬に恋って乙女としてどうなの

「はあ、はあ……っ！」

極度の緊張感に息苦しさは増すばかりで、今はただ生き延びることだけが頭の中を占めた。

「待ちやがれ、その馬と荷物を置いてけっつってんだよ!!」

「ついでに嬢ちゃんの白い肌も拝ませてくれるといいんだけどなあ」

丁重にお断りしたい……！

なぜこんなことになっているのか。何が起きているのか。

単刀直入に言えば、今私は盗賊に追われている。

周囲は見渡す限り草原、遠目には山脈が連なっていて視界は緑で埋め尽くされていた。太陽は大分と傾いているし、じきに日が暮れるだろう。

「俺達から逃げられると思ってんのか!？」

逃げられると思ってなきゃやってらんないだろが！！

心の中で悪態をつきつつ、必死に手綱を握る。私を乗せて走ってくれているのは、一頭の黒馬だった。この場で頼れるのはこの子だけだ。

ちらりと横目に後方を確認すれば、追ってくる賊は三人。下卑た笑みを張りつけている。キモチワルイ。ヤツらも馬を乗り回しているとをみると、恐らく今の私みたいに道行く商人や旅人を襲って奪ったに違いない。

捕まってたまるか！こんなところで終わるわけにはいかないのに。ぎりつと、下唇を噛む。

辺りには複数の馬の蹄が、土を蹴る音が響いていた。

私は馬を巧みに操ることなんてできない。乗るのだって、初めてだ。この揺れは恐怖でしかない。訳も分からず混乱するばかりで、ひたすら黒馬の背にしがみついていた。

お願い……お願い……私の命運はアナタにかかっているの……！！

「ひゃっ、」

もう強張ってしまつてガチガチになっている体が、ビクンと跳ねた。だってアイツら、矢を放ってきたのだ。

幸いにも命中しなかった矢は地面に落ちると硬い音をたて、転がった。外した男が舌打ちするのも聞こえた。

おいおい小娘一人にボーガン使っちゃうのかい？本気なんだね？本気と書いてマジだね？

冷たい汗が背を伝う。徐々にアイツらは距離を詰めてくる。

「アイラー！！」

焦る。焦りに焦った。どうするのどうしたらいいの。ダメだ、捕まったら一巻の終わりだ。それなのに、私は黒馬の名を叫ぶことしかできない。だってわからない。賊に追われた経験なんて初体験だ。できればそんな体験はしたくなかったんだけど。

でも、それが良かったのか何なのか。決死の思いが通じたのか。

黒馬　名をアイラーというこの子は、ぐんと足を速めた。

どんどん離れていく、賊と私との間隔。

すごい……この子、本当に駿足だ。夜明けからほぼ半日走り続けているのに、疲れをまったく感じさせない。速度が落ちることもない。なんて屈強な馬なんだろう。

振り返れば盗賊達も追いつけないと判断したのか忌々しそうにこちらを睨み、やがてくるりと方向転換し、引き返していった。

ほっと、安堵のため息をつく。未だに冷や汗は止まらず、手もじ

つとりと汗ばんでいた。アイラーの背に揺られ、私はまだ生きてるのだと実感する。

助かった。

今になつて震えが私を襲い、どれほど自分が恐怖に駆られていたかが分かる。

日は沈み、すでに闇が降りてこようとしていた。

もしかして……野宿しなきゃいけないの？つい先程あんな目にあつて、野宿で。んもー神様ったらイ・ジ・ワ・ル！

とかそんな場合じゃないんだよ。本当にどうしよう、アイラーもそろそろ休ませてあげなきゃいけないし……。

大地を駆け続ける黒馬の鬣たてがみに目を落とし、途方に暮れていたときだった。

ふと上げた視線のずっと先 空も地平線も夜の藍色に溶けようとしている中で、ゆらりと光が揺らいだのだ。

やがて現れたのは、重厚な外壁が止まるところを知らないように左右に延びて、かなりの広範囲を抱え込み、その中にどっしりと構えた街並み。

「もしかして……着いた!？」

確信した。アレがそうに違いないと。

あの“彼”が住む、王都ノルファアレンだ。

「うそ、やった！アイラーやったね！もう着いたのよ、信じられない。こんなコトってある！？普通三日はかかるんだよ！？アナタの足は世界一ね！」

つつい興奮してしまつて矢継ぎ早に捲くし立てると、アイラーは少し速度を緩め、ぶるると嘶いた。ちなみにアイラーはオスだ。

ほんのちょこつと、ちょこつとだけアイラーと野宿してもいいかな？なんて思つたのは秘密である。だって彼は人間の男よりも頼りになるし逞しいし、私の命の恩人だしスタイル抜群だし非の打ち所がないじゃないか。

いや、しかし。しかしだ。幾らアイラーが男前とはいってもそこは、ね。やっぱり、ね。人間と馬という一線は引いとかなないといけないじゃない？私もこれでも見てくれだけは、十八歳の婦女子ですからね。

誤つた道を突き進みそうになる自分を制するのも、苦難である。人間より獣に惹かれてしまうなんて、大っぴらには言えない。

それに私には『ウルマ』という心に決めた御方が……って！ウルマも獣じゃないか。その時点で変態道突つ走つてしまっている。

一人で悶々しているうちに、もうノルファアレンはすぐそこに迫

つ
て
い
た。

深まる謎と農民の意地

「ふわ〜……」

すごい。とにかく、すごい。すごすぎて感嘆の声しか出てこない。

一歩足を踏み入れば、そこはもう別世界だった。

これがエスタリオン王国の王都、ノルファールレンか。大都市だっ
てことは頭で理解してたはずだけでも、『大都市』という単語だけ
が一人歩きして想像はとつてもあやふやなものだった。

だって、自分自身が小さな村で育ってせいぜい近隣の町にしか足
を運んだことのないんだもの。私にとってはこの街は何もかもが刺
激的で、魅力的だった。

とにかく活気がある。お祭りでもしてるのかってくらい。もう夕
刻だというのに賑やかすぎて人が多すぎて、あちらこちらで会話が
飛び交っていて、いちいち聞き耳を立ててちゃこっちの体がもたな
いってもんだ。

まず建物の造りからして目に見えて違う。大都市にもなると、レ
ンガ造りが主流になるのだろうか。その数だって半端じゃない。

道は入り組んでいて路地に入ればまた大通りに出て、終わりのな
んてあるのかっていうほどにどこまでも街は広がりを見せていた。あ

ちこちで見かけるお店だつてそれぞれが扱う物の種類が豊富で、初めて目にするものばかりだ。

華やかに着飾った人や厳めしい鎧を着込んだ騎士、馬車だつて通りを行き交う。世界中の人がここに集まつてるんじゃないかという錯覚すら、してしまいそうになる。

ああ、つい好奇心に引きずられそうになるけどそんな悠長にはしてられない。

「アイラー、ご主人様はどこ？」

王都に入ってから私はアイラーの背を降りていたから、今は隣を歩く彼に尋ねてみた。

問いかけても答えが返ってくるはずがないことくらいは、いくら私でもわかつてる。そこまで末期じゃないらしい。良かった。手遅れになつてなくて良かった。

じゃあなぜアイラーに不毛な質問を投げかけるのかつて、この子は私の馬じゃないからだ。

アイラーは“彼”の使者だつた。

“彼”が自分のところへ私を連れてくるために遣わした、使者。

“彼”と私を繋いでくれる唯一の接点。

私が王都まで旅してきた理由は“彼”に会うためなんだけど、私

は“彼”について何も知らない。たぶん貴族だろうという推測だけ。それに“彼”が言ったのだ。アイラーが連れていってくれと。

「ひょっとして……ここ、じゃない？」

ぶるると、控えめにアイラーが鼻を鳴らすから。

「……そう」

どつと疲労が押し寄せた。ここにたどり着きさえすれば、それで何もかも順調にいくと思ってたのが甘かった。

だって“彼”は言ったじゃないか。『ノルフアーレンで待ってる』と。

……まさか騙されたのかしら？

あれかい、貴族のお戯れというヤツか？私はただの暇つぶしだったのか！？

「ちくしょう、弄びやがって！」

農民ナメやがって！

誤解を招きそうな台詞を吐きながら、辺りを見回してみた。もしかしたらどこかで私を笑って見物してるかもしれない。でも、そんな人物はいつこうに見当たらなかった。不審な行動は控えよう。おっちゃんに怪訝な眼差し向けられたし。

……そんなわけ、ないよね。騙されてたわけ、ない。

思えば不思議なことだらけだったもの。“彼”と初めて会ったのは いや、正確には会ってはいない。声を『聞いた』だけ。

昨晚、“彼”は私の脳内に勝手に侵入してきて話し出した。しかも私以外の人間には、その声は聞こえていなかった。おかしいよね、絶対おかしいよね。

どうやったらそんなことができるの。魔法使いじゃあるまいし。そもそも魔法なんてあるわけもないし。

とにかくノルファアレンへ向かうことを決めた私に、“彼”が用意してくれたのがアイラーだった。

もちろん馬一頭は田舎の村の農民である私からしたら、高額すぎて手が出せない貴重な存在。

けど、けどもね。貴族のはずなら馬車かなんかで迎えに来てくれるのかななんて、淡い期待もあったりしたのね。ちよっぴり夢見ちゃう可憐な乙女リスちゃん十八歳、うふ。

やめとこう。気持ち悪すぎて自分で自分を撲殺したくなった。

でも実際は……馬車なんていらなかった。アイラーはどんな馬よりも速い足の持ち主だったからだ。

私の住んでいたフルール村からノルファールンまでは馬で三日はかかると思っていたのに、アイラーはたった一日弱で到着してしまった。

常識で考えれば普通じゃあ、ない。“彼”もこの黒馬も。

それならば“彼”に会うのも、一筋縄ではいかないのかもしれない。

「疲れたね。それにお腹もすいたし。休もうか、アイラー」

話しかけると、アイラーは穏やかに目を細めた。まるで返事をするみたいに。人語を理解してるんだろ。そんな目で見られると、ドキドキしちゃうよ私。罪なオスだ。

とりあえずは宿探しだ。腹ごしらえをして、情報収集しよう。

“彼”は世の中の枠組みから外れた人だもの、誰か一人くらいは“彼”について何か知ってるかもしれない。噂でもなんでもいい。

鳴き始めた腹の虫に責めつけられながら、私は宿屋の看板を探した。

乙女になんてことをするんですか

どれくらい歩き回っただろう。

目的は明確なはずだ。寝泊まりできる場所が必要だった。だから宿を訪ねてまわったというのに、何軒断られたことか。

その理由というのも、宿屋の店主みんながみんな同じ口上を垂れた。

“よしてくれ、黒い馬なんて！店に疫病神呼び込まれちゃ困る”

よもやアイラーが宿屋を遠ざけるとは。こんなに素敵な牡馬を見ることがあるのかと、それはもうねちねち問いただしたい。

引き締まった筋肉が脚線美を際立たせ、均整のとれた体軀はまさに芸術。毛並みは高貴さを感じさせる艶を放ち、黒馬ながら、さらに風に靡く鬣なびだけはなんと白銀。

神々しいという言葉がこれほどまでにぴったりな馬が、他にいるとお思いか！？

とは言つものの、店主たちの言い分は真つ当だと思つ。

『黒』はこの世界では忌み嫌われる。黒い動物など尚更だ。人々

は身に付ける物にソノ色を選ぼうとはしないし、牛飼いでさえも生まれた子牛が黒に染まっていれば、泣く泣く処分すると言われている。

それが当たり前だもの。なんとか門を通してもらえはしたけど、アイラーを連れた私はあちこちから視線の集中砲火をくらった。

都会って、苦手かもしれない。田舎者の思考丸だしだけど人が多いと落ち着かない。

「ゆっくりお休み」

ようやく泊めてくれる宿を見つけたのは随分と月が高くなり、夜も深まった頃だった。馬屋にアイラーを繋ぎ餌を与え、おやすみの挨拶を交わす。知らない街に一人でいるのは心細くて、離れるのは寂しい。

「また明日ね、アイラー。明日こそはご主人様のところに帰してあげるからね」

この子だって主人の命を受け、私のここに来てくれたんだ。孤独を感じてないはずがない。頬をさすってやると、アイラーの目元が緩んだ気がした。やっぱり……理解してるんじゃないのかな。人の言葉を。

それから馬屋を出て宿の受付を済ますと、部屋に向かう前に私は店主に話を切りだしてみた。“彼”の居場所を突き止めるために。

「あの、こちらへんで奉公人を募っている貴族がいるはずなんですけど、知りませんか」

「はあ？そんな話、聞いたこともないねえ」

客の前でもお構いなしに、カウンターに肘をつき酒をぐびぐび煽る中年のおじさんこそがこの安宿の店主であるが、この姿勢からすると店を繁盛させようという気はまったくくないらしい。だからこそ泊めてもらえたわけだけど。

それにしても……本当に何がどうなってるんだろ。 “彼” がこの王都に屋敷を構える貴族だというのなら、あの件が知れ渡っていてもおかしくないというのに。

「じゃあ、この辺りに魔法使いがいる……なんて噂があつたりしないですか？」

「ぶふお！」

こてつと小首を傾げカワイコぶって次なる質問を試みたら、おじさんは飲んでた酒を噴き出した。真正面にいた私の顔面に直撃である。酒臭い。

「お嬢ちゃん、なんてことを……滅多なことを言つもんじゃない！

！
」

私にお口から酒鉄砲をくらわしたことなどなかったかのように、
こちらに並々ならぬ形相で身を乗り出してくるおじさん。

違うだろ？そこはまず謝るのが人としての道理だろう？『レディ
に加齢臭たっぷりのお酒ぶっかけてごめんなさい』だろ？

言いたくなるのを抑え、というよりは言わしてももらえず更には
両肩をがっしり掴まれる始末である。ムツとしながらも、このま
までは汚いので布で顔を拭いておいた。

「いいかい、『魔法使い』だなんて教会の連中が耳にしたら明日に
はおまえさん、灰になっちまうぞ」

店主のおじさんは一度周囲を見渡してから声を潜めると、そう私
に忠告してきた。

「お嬢ちゃん、田舎から出てきたんだろ。だから疎いのもしれ
んが気をつけたほうがいい。事情は知らんが異教徒にでもみなされ
れば、火刑は免れん。最近は一層取り締まりが厳しくなってるから
な」

なかなかの迫力をぶつけられ、おじさんが真剣だということは伝
わってきた。ただ、酒臭い。

それにしてもこちらが語らずとも私が田舎者だと見抜かれたということは、よっぽど田舎っぽい格好と雰囲気出してるんだろぅなぁ……。

「まあ……魔法使いかはわからんが、北の森には昔から妙な噂がある。黒い化物を見たとか気の狂っちゃった男が一人で住んでるだとか、そんな話は絶えない。報告を受けて教会は調査団を派遣したが、結局何もなかったみたいだけどな。しかし　　^{あなが}強ち嘘でもないのかもしれない」

おじさんはカウンターを越えんばかりに突き出していた体を引つ込め、今度は神妙な顔つきで語るもんだから私はじっと聞き入っていた。

「あの森に入った人間はごまんといるが、森にいた記憶をなくして帰ってくる者が多いのも事実だ。なにせよ不気味な場所には違いない。今じゃ近づこうなんて物好きもいないし、お嬢ちゃんもあの森に行こうなんて考えてんならよした方がいいぜ」

またお酒のボトルに口をつけて晩酌し始めたおじさんだったけど、色々教えてくれたり助言してくれたり案外いい人なのかもしれない。

なににごめんなさい、おじさん。

私、明日北の森に行ってみます。

これは私の直感でしかないけれど、そこに“彼”がいる気がするの。

私は“彼”にどうしても会わなきゃいけない。

「JJJ……？」

そうだ、きつと。

ここが、この森が、宿屋のおじさんが言ってた“北の森”だ。今までとは空気が段違いだもの。

私よりも遙かに背丈の高い木々が、無限とも思えるほどに森の奥まで続いている。まるで鏡の中に迷い込んだみたいだと、思った。

なんだか少し肌寒いような気もするし、昼間だというのに暗い……感じがするのは、人っ子一人いなくてアイラーの蹄の音しかない静寂の空間がそう錯覚させてるだけなんだろうか。

時折吹く風に葉が擦れ合って立てる音が悪魔の笑い声のように聞こえて、本当に不気味な森だ。奇妙な噂がたつのも、誰も立ち入りがらないのもわかる気がした。

森全体が生きてるというか、意志を持ってる。そんな印象を受けた。正直ここにいたくないし、できれば引き返したい。

だけどアイラーは立ち止まらないし、進めば進むほど“彼”に近づいていってるのは確かだと思う。

弱音を吐くのは早すぎる。怖くても逃げちゃいけない。まだ、会ってもいいんだ。私には守らなきゃいけない、大事な命があるんだから。

それに……この賢い馬が指す道が間違つてるとも思えない。大丈夫、悪魔や魔物なんてこの世にはいない。そうでしょ？ 大丈夫よりズ！

と自分で自分を励ましてると、不意に黒い物体が右手の茂みから飛び出してきた。

「ぎ、ぎよええええええええええええ!!」

森に響き渡る、大絶叫。さらには山びこみたいになってぐわんぐわん共鳴してるけど、そんなことはどうでもいい。

とにかく唐突すぎてしかも気味悪い場所に一人きりでいる不安感から、乙女らしからぬ悲鳴をあげてしまった！

「ん？……猫？」

しばらくパニックしていたものの、よくよく目をこらしてみれば。

「あれ、もしかしてキミ、二日前に私の家に来た猫ちゃんじゃないの？」

私とアイラーの行く手を阻むかのように真ん前でちょこんと座つ

ているのは、一匹の黒猫だった。鋭い目付きに、瞳は黄金の月を嵌め込んだような琥珀色。毛も黒く光沢を放ち、艶々だ。

どこことなく高貴さを漂わせるその黒猫こそ、私が故郷の村を出てはるばる遠方の地であるここまでやってきた“理由”。

一昨日の夜この猫が一枚の紙をくわえ、私の生まれ育ったフルール村に現れたのだ。その紙に記されていた内容は、誰かが奉公人が必要としているというものだった。字がある程度しか読めない私には、それ以上詳しいことはわからなかった。

奉公人を雇うということは裕福な人物に違いないし、貴族だと勝手に思い込んでいた。何だって良かったんだ、生きていくためのお金が手に入るなら。貧しい我が家にはどうしても必要な物。

だから、その時頭の中で聞こえた『誰かの声』に導かれるまま、私はフルール村を旅立った。

「ねえキミ、“彼”はやっぱりこの森にいるのね？」

一昨日の黒猫がいるのだから、きっとそうだ。だって雇い主の使者だもの。

じつと私の顔を品定めするみたいに見つめてくる黒猫に、少し身を固くしてしまう。可愛いんだけど目力が凄いわ。

やがて猫は私からアイラーへと眼差しを向け、まるで彼と目で会話をしているようだった。

何やら確認し終わったのか黒猫は私達に背を見せ、歩き出したのだ。ついてこいと言わんばかりに。アイラーもそれに続く。

いよいよ“彼”との対面の時が、迫ってきた。

いいですか、猫は　　する生物なんです

先導してくれている黒猫のお尻がふりふりしてて可愛い……じゃない。そんなことじゃなくて、何の疑いもなく私はこの猫を村にやってきた猫だと思い込んでしまっているけど、冷静になってみればあり得なくはないだろうか。

フルール村から王都ノルファールンまではアイラーのおかげで一日で行けたけど、普通の馬なら三日は必要だ。さらにそこから北の森まで半日。猫ちゃんが二日前フルール村を尋ねてきて引き返したとしても……アイラー並みの足がなければ、ここに帰ってくるなんて不可能だ。

この子はあるの黒猫じゃない？ いや、絶対あの時の猫だ。確たる証拠はないけれど、私の勘がそう言ってる。猫なのに猫とは思えない洗練された立ち居振る舞いも、一瞬にして引き込まれてしまう金色の瞳も、“彼”が遣わした猫以外には持ち合わせてないはず。

アイラーがそうだったようにこの黒猫も、常識を逸した存在なのかもしれない。そして彼らを使者として従わせる“彼”自身も。

『気の狂っちまった男が一人で住んでるだとか』

宿屋のおじさんの言葉が、ふと頭をよぎった。

……か、帰りたくなってきた……かも。

「ひいつ！」

空恐ろしさに思考がネガティブに傾いたのを見抜かれたのか、黒猫が振り返ってギロリと極上の睨みをきかせてくれたので『逃亡』の二文字は捨てた。両肩に鉛の乗った気分でアイラーの背に揺られ、ひたすら森に行く。

それからのことは余り覚えてなくて、長かったようにも思えるしそんなに時間が経ってなかったようにも思える。とにかく“彼”のもとへ辿り着いたのだと悟ったのは、心地よかった揺れが止まったからだった。

永遠とも思われた樹木の並列する風景が途切れ、私達は陽光満ち溢れる大広場に出た。

息を、呑む。

開けた先に在る光景が余りにも美しくて、余りにも幻想的で。この世の苦痛やしがらみや絶望から解き放たれて、生きてることさえも忘れてしまいそう。それなのにどうして、懐かしささえも覚えるんだろう。

陰鬱な森のなかに、こんな場所があったなんて。大きな円状の広場は太陽の光を遮るものではなく、明るくて暖かった。そして広場中央に聳え立つのは、天まで届きそうな大樹。成人男性十人でも囲めそうにないほどに、幹が太い。見たこともない立派な樹だった。

そんな神様でも宿っていそうな荘厳な樹に、家がある。……って
言ったらおかしい表現になりそうだけど、何て表したらいいのか。
家と樹が『融合している』の方が、まだしっくりくるかな。

幹から屋根がひょっこり出ているし窓もあるし、ドアもある。大
樹全体が住居になっているというか。私が気が狂ったんじゃないか
と思うような光景だ。

それでも先程までの恐怖心が消えたのは、大樹の周りでは色鮮や
かな花が咲き乱れ、小鳥が唄い、蝶がひらひらと待っているから。
まるでそこだけが聖地であるかのように、穏やかな時間が流れてい
た。

私はアイラーから降り、草むらに足をつけた。空気は澄み渡り、
肺から全身、果ては魂までも浄化してくれてそれで何度も深呼吸を
繰り返す。ああ天国……。

「何やってんだ、早く来いブス」

.....

.....

.....へ？今、なんか聞こえた？

うつとりしてるところに割り込んできたのは、低い男の声だった。
でもここには私とアイラーと黒猫以外に、誰もいない。

「さっさとしろ。うるせえんだアイツが」

目が点になるとは、まさにこういうことを指すのかもしれない。だって、だって、喋ってる。猫が喋ってる。

声の主は、超絶うざったそうに私を見てる黒猫だった。

え、もしかして本当に天国だったの？私いつ死んだの？まさかアレ？アレかい？盗賊に追われてた時点で死んでたの？夢オチとかそんな馬鹿な……

これ以上ないくらいにマヌケ面で立ち尽くす私に、軽蔑を込めた一瞥をくれ、黒猫は大樹へと歩き出した。やはりお尻が可愛い……じゃなくて、オスだったんだ……でもなくて、意外と声は男らしくてかつこいい、これも違う。もう意味が分からない。

猫は喋るものなのか？そういう生き物でしたか？

完全に思考回路がイカレてしまった私はふらふらと、人語を発する黒猫の後についていくしかなかった。大樹の家のドアを器用に開けて中に入っていく彼のオケツを、追う。ほんとに尻好きだな私。獣限定だけど。

館と言っても過言では、ない。それが大樹の中の感想だった。ふわりと匂うのは、そこかしこに飾られている花のものだろうか。甘くて安らぐ、緑の匂い。そこにこの樹の香りも加わって、更に館の床や壁の木目が癒しを与えてくれる。

入ってすぐの大広間には机があり、書類やら木の実やらガラス瓶とかが散乱していて乱雑な印象を受けた。内部は外観から想像するよりも遥かに広く、大広間から幾つもの廊下が延びてどこかに繋がっているようだ。

「おい、連れてきたぞバーンハード！」

いきなり黒猫が大声を張り上げるもんだから、忙しく大広間を観察していた私はひっくり返りそうになった。

『やかましい』

そして、次にどこからともなく降ってきた声。黒猫のとは別の声。「人をこきつかつておいて随分な言い方だな」とぼやく猫に、人じゃないじゃんとはさすがにツツコめなかった。

落ち着いていて深みのあるこの声を……私は知ってる。

『ご苦労だった。その馬の骨を、私のところまで連れてきてくれるか』

もう一度、姿なき声がする。間違いない。二日前に村で聞いた声だ。私をここまで導いた、“彼”のもの。

しかし『馬の骨』とは、もしか私のことだろうか。馬ってアイラーしかないけど、アイラーは骨ではないし……。

ぶつぶつ言いながら考え込んでいると、

「いくぞ、ブス」

めんどくさそうに舌打ちし、黒猫が言い放った。馬の骨だとかブスだとか、どうもこの館には無礼者しかないらしい。

度重なる超常現象に感覚が麻痺したのか、不思議と腹も立たない。どうしてもなれ精神で私は口の悪い黒猫に従い、“彼”のもとへ向かった。

目には目を、骨には骨を

緩やかな曲線を描く廊下を歩き、幾つもの部屋の前を通り過ぎてようやく黒猫は止まった。迷路みたいな所だ。大広間からここまでの道のりなんて、覚えちゃいない。

「入るぞ」

ぶつきらばうに黒猫が目の前の部屋の中へと、声をかけた。「どうぞ」と返事が返ってくる。未だに猫が人の言葉を口に行っているという事実を受け入れられないものの、彼らは私の胸中など関係なく事を進めていってしまうのだ。

獅子をモチーフにしたと思われる紋章が刻まれた、一際目を引く豪華な造りのドアを見る限り、この部屋が館の主である“彼”の部屋であるのは明白だった。

思いつきりドアに体当たりをくらわす、黒猫。バイーンと弾かれたドアが勢いよく開け放たれた。なんと斬新なことか。こんな乱暴なドアの開け方は初めてだ。でもまあ猫だものね、仕方ないといえば仕方ないのかも。

胸の高鳴りは、最高潮を迎えている。いよいよだ。声だけしか知らなかった“彼”との、面会の時がきた。私の運命を……握る人。

先に黒猫が足を踏み入れ、一呼吸置いてから私も室内へと進入した。

広々とした部屋の両側に配置された本棚には、ぎっしりと書物が詰まっている。書庫みたいな部屋だ。

その部屋の奥に誰かが、いる。木枠の窓から燦々（さんさん）と入ってくる光が逆光になってしまつて、始めはよく見えなかった。目が慣れてくると徐々に、その人を象る線がはつきりと浮かんでくる。

椅子に腰掛け、足を組んでいる男の人。

「ようこそ、リス。待っていたよ」

ああ、何だろう

「君ならここへたどり着けると、思っていた」

言葉になんか、できない。

なぜだか胸が締めあげられて、苦しくて、泣きたくなる。どうして？初めて会う人なのに……どうして私……。

“彼”は、ただただ綺麗な男性だった。天から降りてきたんじゃないかと思うほどに、人間離れた美しさを備えていた。

顔立ちが整いすぎて逆に怖いくらいで、しかも無表情。愛想笑いなんてしてみせる気配もない。完全に冷めきった目だった。話し方にも抑揚がなくて、半ば棒読みとも取れそうだ。誰かが“彼”の後ろで、腹話術でもしてんじゃないのってくらい。

だけど、私は“彼”の声が好きだった。初めて聞いたときから感じていたこと。

心の隅々までまでじんわりと染み込んでくる、高すぎず、かといって低すぎもしない、安心感を与えてくれる男の人の声。とても落ち着くんだ。

「初めまして……馬の骨です……」

勝手にお口が、自己紹介しだした。確かにこんな人の前じゃ私など、馬の骨。むしろハエのフン。だからって『馬の骨です』って自分で言っちゃう情けなさに涙が出そうだ。

「自ら『馬の骨』名乗ってりゃ世話ねえな」

と、生意気な黒猫が言った。

なんてこった猫にツッコまれてしまった！これはもう人生の黒歴史として刻まれるレベル。

「あ、いえ、リスです。私の名前」

「知っているよ」

慌てて言い直したものの、“彼”はさらりと一蹴してくれた。

「どうして……私のこと、知ってるんですか」

一昨日の夜、フルール村で黒猫から受け取った紙に書いてあった文字が読めなくて、奉公人に志願したくてもどうすればいいかわからず途方に暮れる私に、助け船を出してくれた“彼”。

そのやり方も奇特なもので、突如私の頭の中に“彼”は声を流してきた。他の誰にも聞こえないように、私だけに語りかけてきたのだ。まるで 魔法みたいに。

あの時も“彼”は私を『リス』と呼んだ。

あれよあれよと話は進み、というか強引に翌朝村を出発させられ、近くまで迎えに来てくれたアイラーに乗ってここまで旅をし、今に至るというわけである。

「私が教える義務はないでしょう。馬の骨なら馬の骨なりに知恵を絞ってみるという手があるが、どうかな？」

しれっと、“彼”はそんなことを口にする。にこりともせず、である。

……ふつ。これはいいツンツン具合。じわじわくる腹立たしさだ。

「馬の骨と言いますが、私にも一応リズという名前がありまして、こんなんでも名がある以上、馬の骨には当てはまらないかと」

「失礼。では敬意を表し『凡骨』とお呼び差し上げようか」

わーい凡骨に昇格だっ キラッ

じゃない。そんなに骨が好きか。

絞る知恵もないのに反撃に出たのが悪かったのか、またまた骨で返されてしまったじゃないか。

ああもう、違う。こんな仁義なき骨争いをしてる場合じゃないんだってば!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8511t/>

ウルマを追う娘

2011年10月7日20時36分発行